

精神科医の思うこと②⑤

女性の医師であること

松村 奈奈子

ちょっと前の話、小学5年生の女の子の診察をする事になって、担当の男性心理士さんがお部屋に連れてきてくれました。女の子は部屋に入るなり「あっ、女の先生でよかったー」と言い、「ん？なんでかな」と思いながら話を聞き始めると「お母さんに新しい恋人ができて、いつも夜になんかいやらしい声きこえんねん」「朝とか二人で裸でいるのん見てしもてん」「こんなん、男の先生には言えんかってん」「あー話してすっきりした」と一気に話します。「やさしい男の先生やけど、言えんかった？」と聞くと「うん、いい先生やけど男の人には言えん」と答えます。時代とともに、男だから女だからと意識する事も少なくなってきた感じがしますが、無くなってしまふものではないんやなあと思います。

これまでも診察で「私が女性であるから」と意識させられた場面は何回もあります。なんで今回のテーマは「女性の医師であること」

異動で病院をかわるたびに、前の先生の患者さんを引き継ぐのですが、精神科医も男性が多いのでいつも前医は男性医師でした。異動してしばらくすると、精神科の外来担当の看護師さんから毎回、同じ話を聞きます。「前の男の先生の際はミニスカートで来ていたのにジーンズで来るようになった患者さんがいる」「きれいにお化粧してきていた患者さんが、すっぴんで来るようになった」「いやー意識してはったんやね」と看護師さんはみな笑って話します。

なんとなーく気持ちはわかります。異性の担当の先生にはやっぱ気に入ってもらいたいもんです。特に精神科は長くお話をしたり、通院はけっこう長期になったりと、他の科に比べて一緒にいる時間が長く、異性として意識しちゃう気持ちも起きてしまいますよね。

そして診察での変化は外観だけではありません。これまで男性医師には話さなかった家族など男性からの暴力や心理的虐待の話を、女性患者さんが始めるのも、よく体験します。長期の通院で、過去のカルテにはあまり夫への不満は書かれていなかったり、育った家族の事がほとんど語られていなかったのに、医師交代後しばらくたった頃に「実は夫から殴られることが・・・」「実は自分の父親から昔に身体を触られて・・・」と精神科通院に至った核心の問題が語られ始めることがあります。みな口をそろえて「男の先生には言いにくかったから・・・」といいます。女性の医師としてお話を聞いてよかったなあと思いながらも、性別によって話せない事があるのだと実感します。

逆に、女性だから話しにくい話があるのも意識しています。

うつ病の男性患者さんから「先生は女だからわからないと思いますが、この薬飲んでから勃起してもイカないんですよー、ネットでみたら射精障害の副作用があるってあったんで薬を変えて下さい」なーんてさらっと言われた時は“ちゃんと不満を言ってくれてありがとう”という気持ちになります。もちろん「なるほど了解です。お薬変えてみましょう」と対応します。今までそんな副作用を言ってくれる人がいなかったのも、大変勉強になりました。さらっと話す口調が、上手いなあと思いました。

また、若い男性患者さんが初めての診察から数か月たった頃、ふと「話しておかなければならない話がある」と、中学時代のイジメで、同性の同級生から性的被害にあった事を話し始めました。「話しにくかったよね？話してくれてありがとう」「いや、これは先生には話しておかないといけないと思って」と言われた時も、一緒に治療をしてほしいが伝わって嬉しかったです。

患者さんと医師は「治療」を一緒にしていくパートナーであるので、本来は性別による対応の違いを持たないことが理想ではありますが。しかし、現実には、なかなかそうはいかないケースも多いように思います。

もちろん、性被害など、逆に性別による配慮が必要である診察場面もあると思います。

話はちょっとそれますが、男・女による反応の違いの問題、こんな仕事をしてると意識しておかなくてはなーと思う場面があります。

先日、児童相談所で「家庭内暴力のおやじ」のケースを男女2人の担当者と話しているとき、「どんなお父さんですか？」と私がきくと男性スタッフは「僕らには丁寧に対応しはるんですよ」と話します。横にいた女性スタッフが「えっ、丁寧なんですか？」「私にはけっこう横柄な言葉使いなんですけど」と驚きます。それをきいた男性スタッフが「えっ、女性には横柄なんですか？」と驚く事に。いやー、スタッフの性別で対応を変える“おやじ”いますよねー。性別だけでなく年齢や肩書で対応を変えてくるパターンもありますよね。

だから一人で対応すると、人物像を誤って認識してしまう事もあります。

家庭内暴力での離婚で裁判となり、女性が精神科通院中の場合、女性側の弁護士が暴力による精神状態への影響について、経過の確認などに来られる事が時々あります。ある時、高齢の男性弁護士が被害女性の担当となり訪ねてきました。そして「相手の男性に会ったんですが、話も丁寧でそんな暴力をふるう感じはしなかったんですがねー」と笑って話します。“いやいやそんな奴が一番危ない男やん”と思い「女性に暴力的な男性は、性別によって対応が変わることが多い」と説明しましたが、弁護士は腑に落ちない様子でした。その後、女性患者さんもそんな視点の弁護士に腹が立ったようで、私が弁護士の変更を提案する前に、その男性弁護士をクビにして女性弁護士に頼みなおしていました。

性別で態度を変える事があるのは、こういう仕事をしているとちゃんと理解しておかなくてはいけないことだと思います。それは男性も女性も。

私は、できるだけ「女性だから話せないんです」という場面を作りたくないので、診察ではあまりフェミンな立ち振る舞いはしないし、服装もパンツにシャツといつもシンプルな外観にしています。でも、やっぱり患者さんは私を「女性の医師」として認識して話をします。だから、「女性だから話せない事」がある患者さんがいる事を意識しつつ、女性である自分ができる事は何かなあと思いつつ、いつも仕事をしています。